

NEXT CONCERTS
》 次回東京定期演奏会

第 **763** 回

サントリーホール

2024年 **9月6日(金)** 19:00開演

プレートーク
八木 宏之氏
18:30~

7日(土) 14:00開演 13:20~

生誕200年のブルックナーに捧ぐ
「一曲入魂！」

指揮: **カーチュン・ウォン**
[首席指揮者]

ブルックナー:
交響曲第9番 二短調
WAB109(3楽章構成)

©Angie Kremer

1回券料金 S ¥8,500 A ¥7,000 B ¥6,000 C ¥5,000 P ¥4,500 Ys (25歳以下) ¥2,000

※障害者手帳をお持ちの方は割引がございますので、サービスセンターにお問い合わせください。

次回東京定期演奏会指揮者にインタビュー！

カーチュン・ウォン 編

きき手 八木 宏之

—首席指揮者としての2シーズン目は、ブルックナーの交響曲第9番で始まります。今年生誕200年を迎えるブルックナーは、マーラーと並んで、オーケストラ・ファンにもっとも愛されている作曲家のひとりです。カーチュンさんはこれまで、ブルックナーとどのように向き合ってきたのでしょうか？

私はクルト・マズアのもとでブルックナーの交響曲第4番を学んだほか、ルツェルンではベルナルト・ハイティンクによる第7番のマスタークラスも受講しました。アムステルダムではハイティンクとロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団の第5番のリハーサルにも立ち会っています。ハイティンクは、ブルックナーを偉大な作曲家と崇めすぎることが演奏を生真面目で硬いものにしてしまい、音楽に動きがなくなってしまうと注意していました。

ブルックナーは偉大な作曲家ですが、ごく普通の素朴な人でもありました。彼には今の時代なら問題になっていたかもしれないような欠点もありました。一方で敬虔なカトリック教徒として、教会音楽のために生涯を捧げた人物でもあります。ブルックナーのこうした複雑な人物像を理解することは、彼の交響曲を演奏するうえでとても大切なことです。

—日本フィルとブルックナーを演奏するのは今回が初めてですが、作曲家最後の交響曲である第9番を最初に取り上げるのはなぜなのでしょう？

20代の頃、私が最初に夢になったブルックナーの交響曲は第9番でした。この交響曲の「神聖さ」はいつも私の心を揺さぶります。両端楽章はとてもゆったりとしたカンタービレで、スケルツォを中心に美しいシンメトリーをなしています。今回のように3楽章構成で演奏する場合、第9番の演奏時間は約1時間です。ブルックナーの交響曲のなかではコンパクトな部類に入り、初めてブルックナーを聴くひとにも親しみやすい作品なのではないでしょうか。

—カーチュンさんが考える第9番の聴きどころを教えてください。

私は長らく、ブルックナーの音楽の本質は緩徐楽章にあると考えてきました。第9番の第1楽章と第3楽章はまさにその典型といえるでしょう。第1楽章は3つの主題を持つブルックナー独特のソナタ形式で書かれています。これらの主題が絶妙なバランスで配置されていて、主題から主題へどのように移行するのかに解釈の余地があります。

激しい不協和音の響きが印象的な第2楽章は、悪魔的な性格を持つスケルツォです。この楽章のハーモニーはどこか解決し切らないところがあって、ハーモニーが解決へと至るプロセスが重要なブルックナーの音楽においては特異な存在でしょう。

第3楽章もブルックナーの真髄というべきアダージョです。ブルックナーはその先のフィナーレまで完成させようと奮闘しましたが、神の力が働いて、第9番はこのアダージョで締め括られることになりました。

ブルックナーの交響曲を同じテーマの繰り返しだと批判する人もいますが、ブルックナーはモチーフではなく、ハーモニーを展開することで音楽に緊張感を与える作曲家です。その点はシューベルトに近いですね。音楽をベートーヴェンやマーラーのようにミクロな視点で突き詰めるのではなく、巨大な建築のようにマクロな視点で捉えています。そしてなにより、ブルックナーの音楽は一つひとつのモチーフの質が非常に高いのです。それはまるで、良質な食材をシンプルな調理法で引き立てるイタリア料理のようです。

—ブルックナーの交響曲がイタリア料理とはとても面白い例えです！第4楽章付きの補筆完成版で演奏される機会も増えてきた第9番ですが、今回日本フィルとは3楽章版を演奏されます。

第9番のフィナーレが完成しなかったことには運命的なものを感じずにはられません。近年の音楽学的成果が詰め込まれた第4楽章を含めてこの交響曲を演奏することはとても意義のある試みですが、第3楽章の静けさのなかで終わるスタイルも私は愛しています。私はいつも、第3楽章で終えるのか、それとも第4楽章まで演奏するのか、とても悩みます。今回は、日本フィルとは伝統的な3楽章版を演奏し、翌月のハレ管弦楽団との公演では4楽章バージョンを演奏するという結論に至りました。どちらも私の美意識に則した、魅力的な選択なのです。

—今回の演奏会には特別なゲストが参加すると伺いました。

ブルックナーの第9番を演奏するにあたり、ハレ管の若きコンサートマスター、ロベルト・ルイジさんを日本フィルに招くことにしました。ルイジさんはコンサートマスターになるために生まれてきたような音楽家で、彼と一緒にブルックナーを演奏することは日本フィルにとって素晴らしい経験となるでしょう。また彼が日本フィルでの体験をマンチェスターに持ち帰ることは、ハレ管にとっても意義深いことです。私にとって大切なふたつのオーケストラがこうして互いに交流し、刺激を与え合うことでどのような化学反応が生まれるのか、とても楽しみにしています。

助成:



文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))
独立行政法人日本芸術文化振興会

文化庁
Agency for Cultural Affairs,
Government of Japan